

國學院大學栃木短期大学

FD 委員会活動報告書 第 11 号

令和元（2019）年度の活動報告

1. これまでの FD 活動とこれから
2. 第 1 回研修会
3. 第 2 回研修会
4. 授業アンケート
5. FD 委員会活動記録



1. これまでの FD 活動とこれから

FD 副委員長 菱沼一憲

本学の FD 活動は、FD 委員会活動報告書第 9 号での酒寄雅志前委員長のとりまとめのように、平成 22 年（2010）6 月に FD 委員会規程を定め、以後、定期的に授業改善を目的として公開授業と講演会という 2 本立てで研修会を行い、また春・秋セメスター各一度の「授業アンケート」を実施してきた。

こうした FD 活動とリンクする SD 活動については、FD 委員会活動報告書第 10 号で石坂昌圀事務長より、平成 28 年 3 月の文科省令改訂での SD 義務化にともない、FD 研修会への参加、学内・学外の研修会への参加といった活動を行っている旨の説明がなされている。

およそ下記に一覧した研修会講演の演題に表れているように、授業改善のための具体的な方法や理念、および様々な障害をかかえるなど、

特別な支援を要する学生への対応という二点の課題が大きな柱となっている。研修会では、1 時間半の討論時間を設け、またアンケート調査を実施して、講演内容の理解を深めるよう努め、それを報告書にて公開している。

授業アンケートについては、各教員に結果を通知し所見の記述をお願いするとともに、総括を各年度の報告書に記載し検討を加えている。

今後へむけ課題もあり、令和 2 年 5 月の委員会で都留覚 FD 委員長から、「大学教員をいかに育成するのかという仕組み」の構築、「教育についての具体的目標設定」の必要性が指摘されている。今後とも内外のご意見などを柔軟に取り入れ、活動を有意義なものとしてゆきたい。また、本学の FD 活動を開かれたものとするため、ホームページなどでの公開を進めてゆきたい。

FD 研修会講演の一覧

- 平成 22 年度：渡辺千歳（本学教授）「かかわることが難しい学生」
- 同 23 年度：中村幸弘（本学学長）
「國學院大學栃木短期大学新学科構想—新たな教育を目指して—」
- 同 24 年度：青木一男（國學院大學栃木高等学校教諭）神原邦夫（同）「学力向上のための教授法」
- 同 25 年度：山崎慎一（桜美林大学総合研究機構・グローバル高等教育研究所助手）
「短大生調査を活用した教育改善に向けて」
- 同 26 年度：早田宰（早稲田大学社会科学部教授）
「授業改善の方法と実践—アクティブ・ラーニングを中心に—」
- 同 27 年度：山口喜雄（宇都宮大学教育学部教授）「FD 理念と大学教員 4 課題の自覚的実践」
- 同 28 年度：岩崎好宏（障害者支援施設ひのきの杜 施設長）
「福祉の職場の現状と課題～教育機関との連携を深めるために～」
- 同 29 年度：星雄一郎（本学講師）佐藤秋子（本学准教授）月本由紀子（本学講師）
シンポジウム「大学教育と特別な支援を必要とする学生」

2. 第 1 回研修会 令和元（2019）年 7 月 17 日（水）実施

公開授業

『考古学と音楽教育の連携』

本学教授 早川富美子 本学准教授 中村耕作

（1）地域連携活動の経緯と重要性

大学の教育研究の成果を広く社会に提供することは学校教育法に定められた大学の責務であり、日本史フィールドと子ども教育フィールドは、これまでも栃木地域の遺跡・文化財の調査、近隣教育機関との連携活動を実施してきた。これらはそれぞれのフィールドにおける実践的な学びの場として、本学の学生教育に大きな役割を果たしている。

（2）学内クロスカリキュラムの目的と効果

もともと考古学は、土地を介して一般の方々とのつながりが強く、「パブリックアーケオロジー」という独立した研究・実践分野が存在する。近年では考古学とアートを掛け合わせることで新たな価値を創造しようとする動きが注目されている。

縄文土器の文様には一定のリズム・構造があり、音楽教育における「音楽を形づくっている要素」との親和性がある。一方、音楽教育では、「音楽づくり」に身近な素材を活用する手法が知られており、両者を総合して《土器文様のルールを理解し、それを自然素材で音として表現する活動》を企画した。

考古学側の地域学習・歴史学習・異文化理解、音楽側の自然素材の活用という個別の学習目標に加え、「土器文様の理解をふまえた音楽づくり」という総合的・創造的な学習目標を定めた。これまでに、中根八幡遺跡での発掘体験後、小野寺南小学校の表現活動交流会（夏・冬）で、小学生を対象に実施し、各回ともに両フィールドの学生が事前の練習を経てサポーターとして参加した。本学学生にとっては、従来の学芸員課程・教職課程の実践の場としての意義に加えて、互いの専門分野や職種への理解を深めるという貴重な機会となった。

（3）学習評価をめぐる問題

事前の練習は音楽・博物館実習それぞれの授業内に組み込んで実施しており、後者においては6つの観点で3段階からなるルーブリックを作成し、自己採点および教員採点を試行した。本学としても、また将来の教員・学芸員として学生にとっても、このようなワークショップの各人の取り組みをどのように学習評価や博物館活動評価として位置づけていくかという課題は、今後積極的に追求していく必要がある。

左、中村准教授 右、早川教授



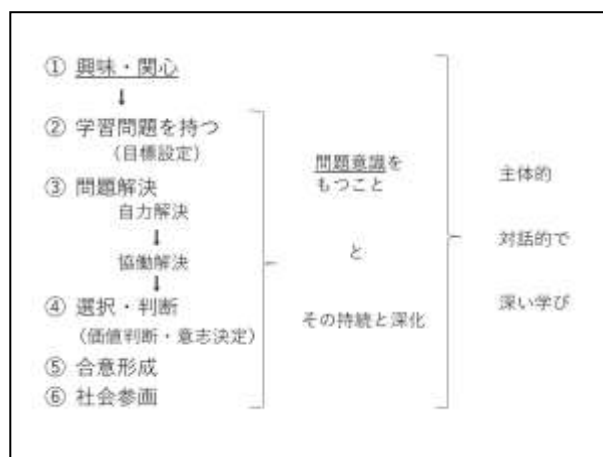
3. 第 2 回研修会 令和 2（2020）年 1 月 15 日（水）実施

講演会

『問題解決（的な）学修に必須の教材選択』 明治学院大学 准教授 長谷川康男

1. 問題解決学習

主体的な学修の基本である「問題解決学習」について、次のような図を示して説明された。



問題解決学習の過程を「①興味・関心」、「②学習問題を持つ」、「③問題解決」、「④選択・判断」、「⑤合意形成」、「⑥社会参画」の6段階に分け、「自主的・自律的な学修」の過程と同意義として解説された。

特に、「③問題解決」の段階では、「自力解決」の段階を設け、一人で調べ・考える機会を保障すると共に、「協働解決」の段階へ進むことによって、自ら解決に関わり、学習を深める機会を保障する過程を設定している。

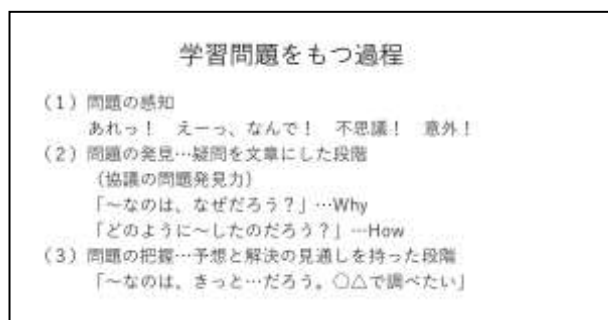
更に、自分たちなりの解決を「選択・判断」する段階を踏んで、様々な「選択・判断」の結果と「合意形成」を行う。

その結果、自ら働きかける「社会参画」の過程へと進むことを目指している。

「問題解決学習」が、単なる「知識の伝達」ではなく、学習によって得た知識と考える技能や判断する資質を身につけ、社会的な問題を解決していく力を身につける学習として考えられている。

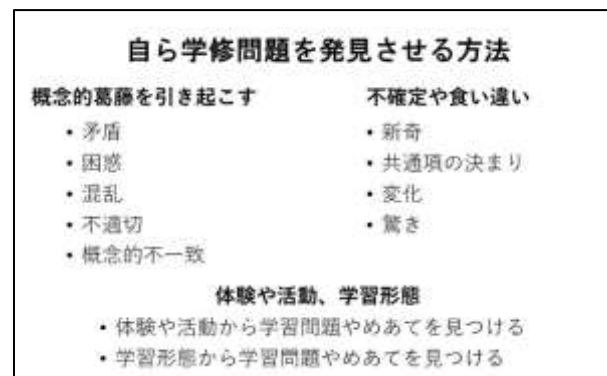
このような問題解決学習の過程で最も重視される段階が、「学習問題を捉える段階」である。

そこで、「学習問題を持つ過程」を明らかにした。



学習問題を持つには、まず（1）問題を感じ、（2）文章化することで問題を明確に意識化する問題発見の過程を通して、（3）捉えた問題を分析・整理し、明確に問題の本質を捉え、問題解決の予想と問題解決への道筋を見通す問題把握の段階に至るとしている。

2. 自ら学修問題を発見させる方法



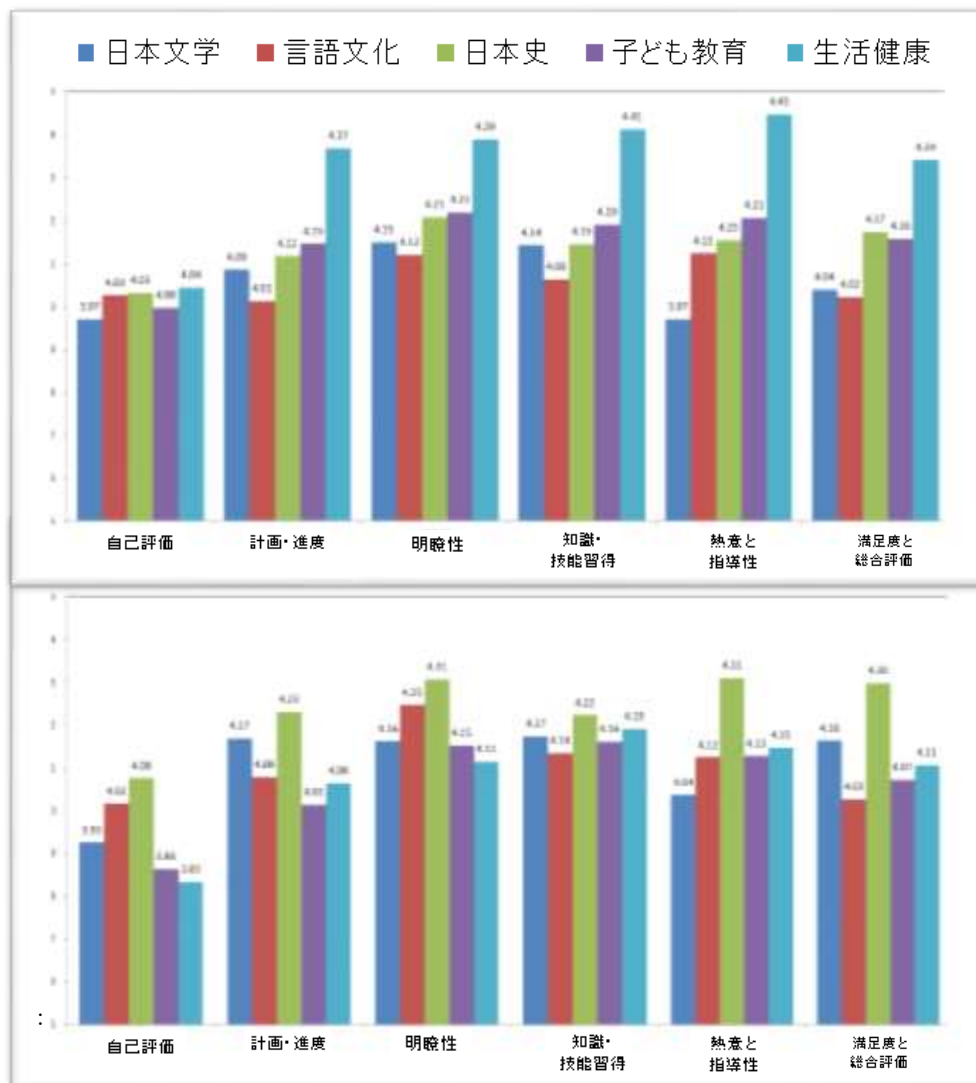
自ら学修問題を発見させるための教材の条件を、「概念的葛藤を引き起こす」方法と、「不確定や食い違い」を発見させる方法、そして、「体験や活動、学習形態」を通して学習問題や学習のめあてを見つけさせる方法の3つの領域に分けて、それぞれについて事例を挙げ説明された。

授業改革の具体的な方法を示した内容であったので、明日から役立つ内容であったと思われる。（文責 都留）

4. 令和元（2019）年度授業アンケート

授業アンケートの結果と分析

令和元年度の授業アンケートの結果について報告する。春・秋セメスター都合 5000 人程で実施した。評価は 5 点満点で、春の総平均は 4.15、秋は 4.12 で、昨年よりはやや上昇。ただし自己評価が春から秋へ全体で 0.7 ポイント下がっているのは昨年同様。春セメの生活健康が 4.33、秋セメは日本史が 4.24 と平均値が高く全体を押し上げている。もちろん数値の問題ではあるが、生活健康の春セメ「熱意と指導性」が 4.45、日本史の秋セメ「熱意と指導性」4.31、「満足度と総合評価」が 4.30 と高い平均値がでている。春秋セメともに日本文学の「熱意と指導性」、言語文化の「満足度と総合評価」の数値の低さがやや目立つ。これらの数値について、成果や改善点など各フィールド・個人でご検討、ご活用いただきたい。



各春
フ
イ
ー
ル
ド
(全
体)
平
均
値

※回答者
日文：432
言語：423
日本史：474
子ども：1111
生活健康：411

※グラフの見方
①横軸：アンケートの諸項目を 6 つに分類、棒グラフの数値は各項目の平均値
②縦軸：アンケートの各項目の評価点 (5.0 満点)

各秋
フ
イ
ー
ル
ド
(全
体)
平
均
値

※回答者
日文：310
言語：281
日本史：318
子ども：806
生活健康：418

(グラフ作成：森岡宏行准教授)

5. 令和元（2019）年度 FD 委員会活動記録

(1) 定例委員会

第 1 回 FD 委員会：令和元年 4 月 24 日
第 2 回 FD 委員会：令和元年 5 月 15 日
第 3 回 FD 委員会：令和元年 6 月 26 日
第 4 回 FD 委員会：令和元年 7 月 24 日
第 5 回 FD 委員会：令和元年 11 月 20 日
第 6 回 FD 委員会：令和 2 年 1 月 22 日
第 7 回 FD 委員会：令和 2 年 3 月 12 日

(2) 研修会

第 1 回 FD・SD 研修会：令和元年 7 月 17 日
第 2 回 FD・SD 研修会：令和 2 年 1 月 15 日

令和元年（2019）年度
國學院大學栃木短期大学 FD 委員会活動報告書 第 11 号
令和 2（2020）年 5 月 31 日発行
編集：國學院大學栃木短期大学 FD 委員会